



新約時代の教会の奉仕

暗唱 聖句

「父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは、困っている孤
児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まずに、身を清く
保つことにほかならない」 (ヤコブ1:27、口語訳)

「みなしごや、やもめが困っているときに世話をし、世の汚れ
に染まらないように自分を守ること、これこそ父である神の御
前に清く汚れのない信心です」 (ヤコブ1:27、新共同訳)

今週の 聖句

使徒言行録2:42～47、4:32～37、マタイ25:38、40、
使徒言行録9:36、Ⅱコリント8:7～15、ローマ12章、ヤコブ2:1～9

安息日 午後 8/24

今週のテーマ

「大宣教命令」として知られる聖句(マタ28:18～20)は、少な
くともクリスチャンによって、聖書の中で最もよく知られている聖句の
一つです。この聖句は、しばしば私たちの宣教声明と評されるとともに、あらゆる
種類の宣教や伝道プロジェクトにこれまで刺激を与えてきました。確かに、クリス
チャンはこの聖句に触発されて、時には大きな犠牲を払いながら、福音を広めよ
うと世界中へ出て行ったのです。

ところで、イエスは「大宣教命令」の中で何と言われたでしょうか——弟子をつくり、
バプテスマを授け、「あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」
(マタ28:20)。そしてすでに触れたように、イエスが私たちに命じられたことの多
くは、困窮している人、苦しんでいる人、自分で自分の面倒を見ることのできない
人々を世話することと関係しています。従って、イエスの最初の弟子たちへのこ
れらの命令は、新しい任務、つまり彼らがそれまでに見聞きしたことのないもので
はなく、むしろイエスが彼らと一緒にすでに取り組んでおられた使命の継続
であったということ、私たちは覚える必要があります。従って、イエスの教えのこ
のような側面が、大宣教命令を果たすことの一部として、新しい教会共同体〔初
代教会〕の生活の中にはっきり見られるのです。

イエスの昇天と、五旬祭での聖霊降下のあと、信者の集団は急速に成長し、イエスに従う者たちの中に初代教会を、つまり新しい種類の共同体を生み出しました。当初、それはイエスの最初の弟子たちによって導かれていました。しかし、この新しい共同体は、彼らが自分たちの中から作り出したものというよりは、イエスの教えと奉仕の上に築かれたもの、ヘブライの聖書と預言者たちの長い歴史を活用したものでした。

問1 使徒言行録 2：42～47 と 4：32～37 を読んでください。初期の教会共同体に関するこれらの描写の中で、あなたは何が重要な要素だと思えますか。

イスラエルの人々は、公正で寛大な社会のための青写真を十分に実現できなかったように思えますが、初期の教会共同体は、「あなたがたのうちに貧しい者はなくなるであろう」（申 15：4、口語訳）という教えを真摯に受け止めました。彼らの信仰の実際的あらわれの一つは、生まれたばかりの共同体の外にいる人たちの——特にいやしの働きを通して（使徒 3：1～10、5：12～16 参照）——祝福になるだけでなく、仲間の信者の必要を満たすために、自分たちの物的資源を分け合った——土地を売って、調達したその資金を提供さえした（同 4：34～5：2 参照）——ことでした。

しかしこの共同体は、どう考えてみても、理想的な社会などではありませんでした。信者の数が増えるにつれて、これらの資源の管理、特にやもめたちへの日々の食事の分配に関して緊張が高まりました（使徒 6：1 参照）。この集団の生来の指導者であった弟子たちは、福音を宣べ伝えることに専念したいと思いました。目の前の状況に対処するため、彼らは何らかの再編成をする必要があったのです。

それゆえ、教会共同体の実務的な事柄を重点的に扱う 7 人の人が任命されました。たぶんそれは、教会で発揮すべきさまざまな奉仕、能力を最初に認めた時であり、同時に、教会の生活やあかしにとって実務的な奉仕の重要性を明らかにしました。「モーセやダビデの時代に、神の民の中で指導者を導いた同じ敬虔な正義の原則は、福音による律法の時代に、新たに組織された神の教会を監督する人々によっても、受け継がれなければならなかった」（『希望への光』1391 ページ、『患難から栄光へ』上巻 98 ページ）。

◆ あの初期の共同体がどのようなものであったか、思い描いてみてください。あの同じ原則を、今日どのように反映させることができますか。

イエスが予告されたように、教会が「エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで」（使徒1:8）広がり始めると、新しい信者たちはイエスの信仰と奉仕を担いました。そのような人たちの中に、ヤッファの町に住む（タビタとしても知られる）ドルカスがいました。間違いなく、彼女はイエスのあの命令を特に真剣に受け止め、裸の人に着せるときには、イエス御自身のためにそうしていました（マタ25:38、40参照）。

問2 使徒言行録9:36におけるドルカスと彼女の奉仕に関する描写を読んでください。あなたの生活と奉仕をどのように描いてほしいと思いますか。

ドルカスは「弟子」（使徒9:36参照）と呼ばれ、彼女の忠実さ、行動力、他者を重視する態度は、地元の町を越えて広く認められていました。ドルカスの奉仕は、そのようなものであったようです。

ペトロは近くのリダの町を訪ねており、ヤッファの人たちは、ドルカスの早すぎる死を受けて、彼に来てほしいと頼みました（使徒9:37～41参照）。ペトロはヤッファに着くと、ドルカスが貧しい人たちのための働きを通して助けた多くの人に会います。彼らは、ドルカスが作った服をペトロに見せて、彼女がどのように彼らやほかの人たちを助けてくれたのか、多くの物語を彼に語りました。

やがてペトロがドルカスのために祈り、神は彼女を復活させられました。そのことは、他者に奉仕するために献身する人の場合、人生がいつもうまくいくという保証ではありません。結局、ドルカスはすでに病気と死を体験していましたし、教会のやもめたちに仕えるように任命された最初の執事の1人、ステファノもまた、最初の殉教者になったのですから……（使徒7:54～60参照）。奉仕の人生は平たんな道ではありません。時として、それは悪路にさえなりうるのです。

しかしこの物語の中で、神はヤッファの人々に強い衝撃を与えるため、ドルカスの人生と死の双方における神の愛と力が広く認知されることをお用いになりました——「このことはヤッファ中に知れ渡り、多くの人が主を信じた」（使徒9:42）。

◆ もしあなたが亡くなるとしたら、ドルカスの奉仕が人々に覚えられ、嘆かれたように、あなたも嘆かれ、惜しまれるでしょうか。あなたは他者への奉仕に用いることのできるどんな（服を作るドルカスの技術のような）実用的技術を持っていますか。

回心ののち、使徒パウロは異邦人の世界に福音を伝えるという使命を担いました。神が彼に成功をお与えになったことで、キリスト教信仰を生み出したユダヤ教の始祖と、イエスに従う新しい異邦人たちとの関係について、重要な疑問が提起されました。この問題を話し合い、こういった複雑な疑問に関して神の導きを求めるため、ユダヤ人と異邦人のクリスチャン指導者たちの会議がエルサレムで開かれました。この会議とその結末は、使徒言行録 15 章に記録されています。

しかしパウロは、ガラテヤ 2 章のこの会議についての報告の中で、異邦人の間で奉仕を続けるためにエルサレム会議から受けた指示に、もう一つの重要な要素を付け加えています——「ただ、わたしたちが貧しい人たちのことを忘れないようにとのことでしたが、これは、ちょうどわたしも心がけてきた点です」(ガラ 2:10)。

そして、パウロは個人的に(使徒 20:35 参照)、彼が奉仕をした至る所で、この重要な点に従い続けました。エルサレムの初代教会のように、あらゆる仲間の信者を受け入れるために、パウロはクリスチャン共同体のビジョンを広げたのでした。

問3 II コリント 8:7～15 を読んでください。福音と惜しみなく施すことを、パウロはどのように結びつけていますか。

パウロは、困難な状況にある仲間の信者に対する惜しみなさや配慮を信者たちに奨励するため、旧約聖書から二つ引用しました。より広範囲の教会共同体の間で施し、分かち合うことの手本として、神が荒野でイスラエルの人々に惜しみなくマナをお与えになった物語を引用しました(II コリ 8:15 参照)。また、詩編 112:9 も引用しています——「彼〔主に従う人〕は惜しみなく分け与え、貧しい人に施した。彼の慈しみは永遠に続く」と書いてあるとおりです(II コリント 9:9)。

パウロは読者に、施すことに関して計画的であるように、定期的に収入の一部を取りのけるように勧めています。そうすることで、パウロかテトスが彼らの教会を訪ね、献金を集めてエルサレムの困窮しているクリスチャンたちに渡すとき、ささげやすいからです。彼は一つの教会の手本を用いて、同様の惜しみなさをほかの教会にも促しました。「この奉仕の業が実際に行われた結果として、彼らは、あなたがたがキリストの福音に従順に公言していること、また、自分たちや他のすべての人々に惜しまず施しを分けてくれることで、神をほめたたえます」(II コリ 9:13)と、彼は書いています。

◆ 私たちに示されたあらゆる目的や必要に応えることができないとき、私たちはどのように優先順位をつけるべきですか。

パウロが書いたローマの信徒への手紙は、キリストの死を通して信仰によって救われるという偉大な教理を綿密に説明していることでよく知られています。しかし、そのような教えが11章続いたあと、強調点が変わります。パウロは、イエスと福音書の物語の中に啓示されている神の恵みと愛に基づいて、正しく生き、愛すことへの実際的な指針を与えているのです——「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」(ロマ12:1)。実質的にパウロは、神がイエスによって私たちのために成し遂げてくださったことのゆえに、私たちはこのように生きるように、と言っているのです。

問4 ローマ12章を読み、とりわけ、他者(特に困窮している人たち)を愛し、気遣うようにという教えに注目しながら、要約してください。

ある意味において、ローマ12章は、パウロのいくつかの書簡において彼がもつときめ細かい注意を払っている多くの主題の要約としての役割を果たしています。彼は教会という体の中におけるさまざまな役割や賜物について語っており、そこには他者に奉仕すること、他者を励ますこと、惜しみなく施すことが含まれています(3～8節参照)。しかも私たちは、これらのことを単にするのではなく、熱心に(とりわけ、愛をもって)しなければなりません(9～11節参照)。

パウロは実際的な言葉を用いて、このような生活がどのようなものであるかを説明しています。彼は信者たちに、どこにしようと、可能なときはいつでも、困難や迫害の中で忍耐深くあり、困窮している人を世話し、平和を実現する者となり、(すでに触れたように)悪や不公正に親切で応じ、善を行うことによって悪に勝ちなさい、と勧めています(ロマ12:20、21参照)。

ローマ12章は、新しい人として生きるとはということか、個人として、また信仰の共同体の一員として神に仕えるとはということかを概説しています。パウロはイエスの新しいこの弟子たちに、十字架の死によってイエスが彼らのために成し遂げてくださったことと永遠の命という希望のゆえに、彼らの生き方、優先順位、行動が変わらなければならない、と語りました。彼らはローマ帝国の中心にある抑圧的で(しばしば)無慈悲な社会に住んでいたため、パウロは彼らに、異なる生き方をしなさい、と命じています——「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしておいて自分を変えていただき……なさい」(ロマ12:2)。

◆ 今日イエスに従う者として、あなたが正しく生き、愛するために抵抗する必要のある地域社会の考え方や習慣には、どのようなものがありますか。

キリスト教の言い伝えによれば、ヤコブ（イエスの義兄弟）はエルサレムの初代教会の指導者になり、エルサレム会議で議長を務めたヤコブは彼でした（使徒15章とともにガラテヤ1章、2章参照）。もしそうであれば、ヤコブの手紙として聖書に残されている書簡の著者は彼であったようです。

ヤコブというのは、一般的な名前でしたが、もしこれらの人が同一人物であるとしたら、彼はまた、「義人」ヤコブとして知られていた教会の指導者であったかもしれない。その呼び名は、他者の扱いにおいて適切に優先順位をつけ、しばしば忘れ去られたり、虐げられたりした人たちの面倒を見た賢明な指導者を示唆します。彼の名前を冠した書は、「新約聖書の箴言」と呼ばれてきました。実際的な信心深さと、神に従う者として賢明に生きることに焦点が合わされているからです。

ヤコブの手紙の著者はクリスチャン読者に、「御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません」（ヤコ1:22）ということを出させ、また、重要な（神の目に清く持続的な）宗教は、困窮している人や虐げられた人たちを世話し、周囲の社会の不健全な影響力に抵抗することに焦点を合わせるということを感じさせたい、と切望していました（同1:27参照）。

問5 ヤコブ2:1～9と5:1～6を読んでください。富んでいる人たちに対するヤコブの態度は、大抵の社会で通常取られていた態度と、どのように異なりますか。教会共同体の中での、富んでいる人と貧しい人の扱われ方について、特にどのようなことを指示していますか。

だれかの幸福を願うことは（彼らに神の祝福を願うことさえ）、もし彼らが寒さと空腹で苦しんでいるなら、ほとんど慰めにならないと、ヤコブは主張します。実際に食べ物や服を与えることのほうが、あらゆる気高い感情や祝福の言葉よりも、彼らに対する私たちの関心をあらわし、はっきり示すうえでずっと有益でしょう（ヤコ2:14～17参照）。ヤコブはこのことを、私たちと神との関係という観点において、信仰と行いの相互作用の一例として用いています。彼はまた、隣人を自分のように愛することに関してイエスが教えられたことも繰り返しており（同2:8参照）、この掟が日常生活においてどう守られるべきかを示しています。それが神と他者への奉仕において実行されるのは、救いを得るためではありません。なぜなら、それは真の信仰のあらわれだからです。

◆ 無意識だとしても、なぜ貧しい人よりも富んでいる人を好むのですか。

参考資料として、『患難から栄光へ』第32章「豊かにまく者は豊かに刈り取る」を読んでください。

「救い主は、悲しみに満ち、試みられている魂を世話することのできる教会を建てるために、ご自分のとうい生命をお与えになった。信者の群れは、貧しく、無教育で、無名の人たちかもしれない。しかしキリストのうちにある時、彼らは、家庭において、近隣において、教会において、また遠い地方において働くことができ、その結果は永遠と同じように遠大なものとなる」（『希望への光』1011ページ、『各時代の希望』下巻112、113ページ）。

「初代教会は、おのれを忘れて惜しみなく施すことによって、大いなる喜びに満たされた。なぜなら信者たちは、自分たちの努力が、暗黒の中にいる人々に福音の言葉を伝えるのを助けていることを知っていたからである。彼らの物惜しみしない心は、彼らが神の恵みをむだに受けなかったことをあかししている。聖霊のきよめによる以外に、いったい何が、このような寛^{ひろ}い心を生じさせることができようか。信者と未信者の目の前において、これは恵みの奇跡であった」（『希望への光』1486ページ、『患難から栄光へ』下巻25ページ）。

話し合いのための質問

- ① 世界規模のセブンスデー・アドベンチスト教会は、どのように什一や諸献金を世界のさまざまな場所で分かち合うかを決定するために、今週の研究の中で話し合った原則のいくつかを用います。世界規模の資源分配というこの種の制度には、どのような利点がありますか。

まとめ

イエスの命令と聖霊の力に促されて、弟子や初期の信者たちは、可能な限り広範囲でイエスのメッセージと使命を分かち合い始めました。イエスの教えとヘブライ語聖書を頼りとした初代教会は、新しい種類の共同体であり、共同体の内外において、彼らの持ち物を困窮している人たちと分かち合いました。このような教会に送られた手紙に記録されている彼らの模範と教えによって、最初のキリスト教指導者たちは信者に、（とりわけ困窮している人たちに対して）忠実な生活、奉仕の生活を送るように勧めました。